3. 機は熟した…

◆決勝日

朝から、小雨まじりのツインリンクもてぎ。霧も立ち込め、辺りは暗い。予選速報には、ロッテラーダブルポールの文字が躍っていた。いよいよ決まる、その日を迎えた。

決勝レース１は午前 10 時 25 分から、レース２は午後 2 時半からのスケジュール。今回のレース１は、ピットストップの義務がないガチンコレース、レース２は、タイヤ交換の義務がある（ドライタイヤ装着の場合に限る）というレギュレーションだ。前日の予選と路面コンディションが変わったため、レース１の前のウォームアップ走行は 13 分間に延長された。

ロッテラー選手 40 ポイント、中嶋選手 34 ポイントで迎えた決勝。早ければレース１でチャンピオンが決まってしまう可能性があった。ポールシッターのロッテラー選手にアドバンテージがあることは確かだが、“ 大事なところでミスしちゃうから ” と東條エンジニアはいつものように冷静。シリーズチャンピオンの行方を詰めかけたファンに見守られながら、レース１のスタートを待った。

◆レース１（23Laps）歓喜の時

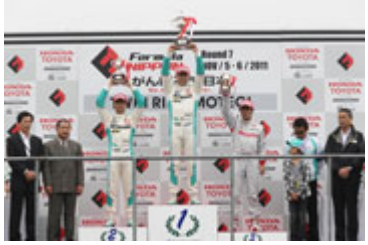
まだレコードラインは乾いているが、小雨が降る中、ロッテラー選手と中嶋選手は、１－３のポジションからスリックタイヤでスタートした。シグナルがブラックアウトすると、注目のスタートは、二台ともミスが無く、１コーナーをワンツー体制で通過、中嶋選手はポジションを１つ上げることに成功。後方グループは１コーナーで混乱、コースアウトするクルマも見られた。

トップの TOM'S の二台は、オープニングラップから、おもしろいように後続を引き離していく。ロッテラー選手は、1 周目で約 4 秒、3 周目で既に、3 番手のクルマに 8 秒以上のギャップを築いていた。中嶋選手は、ロッテラー選手を終始猛追。常に僅差で追い続け、終盤の 16 周目には 0.698 秒差で更に背後に迫る。しかし、レースはトップを快走するロッテラー選手の手中にあったと本人談。そして、いわゆる“チョイ濡れ”状態の路面は、ドライバーの中でもロッテラー選手の最も得意とするところであり、また抜きにくいコースですでにロッテラー選手は、余裕の走りを見せていた。中嶋選手は、全く諦めることなく、ファステストラップを連発。TOM'S の二台の攻防は最後まで続いたものの、最終的に中嶋選手が前へ出ることは叶わず、また、TOM'S の二台は後続を 30 秒以上も引き離してチェッカー。強い TOM'S を魅せつけ、レース１を終えた。この時点で、ロッテラー選手のシリーズチャンピオン、中嶋選手のランキング２位が確定した。

ファンの方から届いた千羽鶴がずっとピットに掲げられていた。以前、TOM'S が 2009 年の SUPER GT のチャンピオンのかかったレースの際にも、多忙の中おひとりで作って届け

てくださった。ロッテラー選手には、この時に“千羽鶴”の意味をスタッフが教えてあげていた。そして、横断幕にケーキと、ロッテラー選手は自分のビッグファンの方々にも、表彰台からお礼述べ、この時も感謝の気持ちを忘れなかった。

▽レース後のコメント



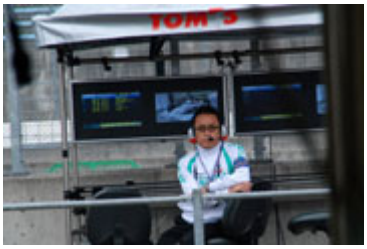
ロッテラー選手

「とても良いレースだった。スタートして数周でクルマのコンディションを合わせられるようにし、その後は自分のリズムで走ることを考えていた。一貴は常にプッシュをして来て、かつ最後のセクター２では、かなりハードに詰めて来ることがあったが、このレースは自分がコントロールできると思っていたので、パスされることはないと考えていた。クルマの調子がとてもよく、楽しいレースだった。ポイントは、計算していなかったので、チェッカーを受けた時点で、サインボードを見てチャンピオンになったことがわかったが、無線で確認をした。ウィニングランをしていて、第三セクター付近でやっと実感が湧いた」

中嶋選手

「3 番手からのスタートで、抜きにくいコースという事もあり、スタートで前へ出ることを狙って行った。アンドレがミスなくスタートを決めたので、あとは少しでもプッシュしてミスを誘うよう、極力プッシュして走行しました。自分自身としては、満足の行くレースではあったが、残念ながらトップには届かなかったことは自分の課題。22 周、ずっと予選を戦うような気持ちで走れたのですがすがしい気持ちである」

◆次は追われる立場になる



会見が終わり、ホスピタリティに戻りリラックスしたところで、念願のダブルタイトルについて舘監督に話を聞いた。

「悲願のタイトルで、今年は本当にうちは強かった。いいドライバーとスタッフもみんな良い仕事をし、チームに力がついたということを感じるシーズンだった。レースをやっている以上、ポールトゥウィンが目標なわけで、これまでそれができず…。シーズン前半は予選がとても悪く、ただレースには強くて、そういう予選の悪い時はコレしかない！という作戦で臨み勝ってきた。最後の最後で、ポールトゥウィンが達成できたことはとてもうれしい。参戦から６年、いつもチャレンジャーという気持ちで戦ってきた。この６年はあっという間だったね。これからは追われる立場になるが、そっちの方が長いかもね」

夫人に祝福を受ける舘監督。百戦錬磨の TOM’S ではあるが、表彰台では、監督がこみ上げるものがあったのだろう、言葉に詰まるシーンもあった。参戦当時、データの無い中、チームは戦っていた。それでも他チームからは、新規チームだが“要注意”とマークされるほどだった。とうとうフォーミュラ・ニッポンも王者となったのだ。この６年でノウハウも蓄積され、更に強くなった TOM’S。2011 年 11 月 6 日、とうとう晴れの日を

迎えた。まだレースが残っている為、チームスタッフは黙々と作業をしていた。
東條エンジニアは、昨日のポールポジションの方がうれしかったかな？と、ほぼ間違いないと言われたチャンピオンの獲得よりも、初めて獲得したポールポジションの方が、感慨深かったようだ。さすがに、うれしさをかみしめる暇もない今回のレーススケジュール。あとで、じっくり味わってもらいたい。
そして最終戦、最後のレース、レース２に午後２時半から、再び全力で臨むのである。